

## 中国語の学習成果を左右する要素の分析

### An Analysis of Factors Affecting the Results of Learning the Chinese Language

竹中佐英子  
(Saeko TAKENAKA)

**キーワード：**個別性、入試英語の得点、高校評定、授業の受け方、評価

**Key Words：**individual differences, a score in an English entrance examination,  
students' evaluation in high-school, attitude in class, evaluation

#### 0. テーマ選定理由

大学で外国語を教授する場合、1人の教員が数十人の学生を相手に、1冊の教材を用いて単語の意味や文法を解説し、教授した知識を使ってヒアリング、会話等の練習をする。教員は各学生を同じ回数発言させ、平等に矯正を施す。しかし、同一クラスで、同一教材を使用し、同一教員から同様の指導を受けても、各学生の学習成果は一樣ではない。目白大学外国語学部アジア語学科中国語専攻（以下“C専”）では、学習歴わずか4カ月目でも、学生間に大きな差が出来てしまう。

表1はC専1年生春学期期末試験の各科目の平均点、最高点、最低点を示したものであるが<sup>(1)</sup>、満点近い学生からほとんど得点できない学生までおり、短期間にして学習成果に非常に大きな差が出来ていることがわかる。中には一度も欠席せず、きちんと授業も聞いているのに、2年生になっても“課”（授業）“吃”（食べる）“很”（とても）といった基本単語さえ覚えられない学生もいる。このように著しく成果の劣る学生が存在すると、授業進度は停滞し、成績の良い学生までもが学習意欲を削がれ、クラス全体の成果が上がらない、という悪循環に陥る。

同一条件で学んでも、学習者により成果が異なるのは何故だろうか？第二言語習得研究では個別性（individual difference）に着目する。第二言語習得の成果を左右する要素に、Jakobovits1971.は▽動機（33%）▽才能（33%）▽知能（20%）▽その他（14%）——の4項目、Altman&Vaughan1980.は▽年齢▽性別▽言語学習経験▽母国語力▽性格▽才能▽態度、動機▽知能▽感覚器官▽学習方式▽認知方式▽学習ストラテジー（戦略）——の12項目、Skehan1989.は▽才能▽動機▽学習ストラテジー▽認知、感情——の4項目、Larsen&Long1991.は▽年齢▽態度、動機▽性格▽認知方式▽大脳半球の側性化（Lateralization）▽学習ストラテジー▽その他——の7項目を挙げる。日本の大学における中

国語教育研究では、学生が成果を上げない原因を語彙や文法等、中国語の性質自体の中に見出そうとする試みは多いものの、言語学習適性（Aptitude）、学習環境に対する評価等、学生の個別性と成果の関係についてはほとんど研究されていない。

本稿はC専の学生の入学前と入学後の成績、アンケート調査等の結果を考察し、中国語の学習成果を左右する要素を探ろうとするものである。日本の大学における外国語教育研究に一石を投じることができれば幸いである。

表1. C専1年生春学期期末試験の平均点、最高点、最低点（1科目当たり100点満点）

	1期生（H17年度入学）			2期生（H18年度入学）			3期生（H19年度入学）		
	平均	最高	最低	平均	最高	最低	平均	最高	最低
中国語1A（作文）	73.3	99	14	69.44 76.77	98 99	43 46	77.8 86	96 99	59 53
中国語2A（読解）	74.6	102	0	72.7 75	100 95	1 30	74.2 78	100 99	13 36
中国語3A（会話）				65.6 60.95	94 95	23 32	72.2 56	100 94	24 17

## 1. 調査方法

### 1. 1. 調査対象

調査対象はC専の1期生（平成17年度入学）と2期生（平成18年度入学）である。表2にそれぞれの入学者、平成19年1月迄の退学・除籍者、C専を第一志望として受験した者、学内他学科を不合格となり、定員（30人）割れしたC専の2次募集に応じて入学した者、親族に中国語母語話者がいる、あるいは中国語圏に長期間滞在した経験がある等、入学以前に中国語の知識が蓄積されている者の人数を示した。

ベネッセコーポレーションの「学部系統別難易ランキング」<sup>(2)</sup>によると、C専の偏差値は42であり、調査対象の基礎学力は高くない。

表2. 調査対象の内訳

	入学者	退学・除籍	第一志望	他学科第一志望	他大合格校無	併願校無	中国語蓄積有	留年
1期生	26人	4人 (15%)	7人 (27%)	19人 (73%)	14人 (54%)	0人 (0%)	0人 (0%)	1→2年 4人 (15.38%) 2→3年 1人 (3.846%)
2期生	12人	1人 (8%)	7人 (58%)	5人 (42%)	2人 (17%)	3人 (25%)	2人 (17%)	1→2年 2人 (16.67%)

### 1. 2. カリキュラム

表3にC専の専門教育科目のうち、1, 2年次に配当されている「中国言語」に関する必修科目とその授業時間数、担当教員、教材の内訳を示した。

表3. C専の専門教育科目

科目名 (Aが春学期、Bが秋学期)	授業時間数	配当年次	担当教員	教材
中国語1 A/B (作文)	週2こま	1年	日本人男性、筆者	1種類
中国語2 A/B (読解)	週2こま	1年	日本人男性、日本人女性	1種類
中国語3 A/B (会話)	週2こま	1年	中国人男性、日本人女性	2種類
中国語4 A/B (作文)	週1こま	2年	中国人女性	1種類
中国語5 A/B (講読)	週1こま	2年	日本人女性	1種類
中国語6 A/B (読解)	週2こま	2年	筆者	1種類
中国語7 A/B (会話)	週2こま	2年	日本人男性、日本人女性	2種類
中国語学概論 A/B	週1こま	2年	日本人男性	1種類

### 1. 3. 中国語学習成果の指標

中国語の学習成果の「指標」として、C専の専門教育科目（表3参照）の学期末試験の得点（計19種類、1種類100点満点）を用いた。いずれの試験も出題範囲が長く、持ち込み一切不可で行われ、各学生の中国語の学習成果を客観的に示しているからである。

### 1. 4. アンケート調査

質問紙を用いたアンケート調査を毎学期末、計4種類実施した。いずれも記名式で、質問事項とそれに対する選択肢は個人面接中に出された意見を中心に作成し、回答は複数の選択肢から選ばせたり、自由に記述させたりした。学生間に成果の差が出た要因を見極めるため、回答結果は「指標」を得点差の大きいところで上位、中位、下位の3つに区切って集計した。調査3-2, 4-2にある「留年生」とは、1年次に「中国言語」に関する必修科目（表3参照）を1単位も取得できなかったため、2年次に2年生用科目の履修を認めず、1年生用科目だけを再履修させた者を指す。表4に調査実施日、回答者数等を示した。

表 4. 調査結果集計上の成績分類の指標、成績区分の定義

	実施日	調査対象 (学習歴)	成績分類の指標	回答者 数	成績区分 (上位、中位、下位)の定義
調査 1	2005 年 7 月	1 期生 (4 カ月)	中国語 3 科目 (作文、 読解、会話) の春学 期の成績 (A、B、 C、D)	22 人	上位 (11 人): 3 科目とも「A」 中位 (7 人): 1 科目以上に「C」有り 下位 (4 人): 3 科目とも「C」や「D」
調査 2	2006 年 1 月	1 期生 (10 カ月)	中国語 3 科目 (作文、 読解、会話) の秋 学期末試験の合計点 (500 点満点)	22 人	上位 (8 人): 387 ~ 416 点 中位 (7 人): 245 ~ 376 点 下位 (7 人): 54 ~ 173 点
調査 3-1	2006 年 7 月	1 期生 (16 カ月)	中国語 5 科目 (作文、 講読、読解、会話、概 論) の春学期中間・ 期末試験の合計点 (700 点満点)	18 人	上位 (9 人): 546 ~ 615 点 中位 (5 人): 430 ~ 528 点 下位 (4 人): 8 ~ 386 点
調査 3-2	2006 年 7 月	2 期生 (4 カ月)	中国語 3 科目 (作文、 読解、会話) の春 学期末試験の合計点 (600 満点)	13 人	上位 (4 人): 522 ~ 577.5 点 中位 (3 人): 367.5 ~ 456.5 点 下位 (3 人): 221.5 ~ 274.5 点 * 留年生 (3 人)
調査 4-1	2007 年 1 月	1 期生 (22 カ月)	中国語 5 科目 (作文、 講読、読解、会話、概 論) の秋学期中間・ 期末試験の合計点 (700 点満点)	18 人	上位 (7 人): 490 ~ 590 点 中位 (4 人): 409 ~ 479 点 下位 (7 人): 231 ~ 387 点
調査 4-1	2007 年 1 月	2 期生 (10 カ月)	中国語 3 科目 (作文、 読解、会話) の秋 学期末試験の合計点 (600 満点)	15 人	上位 (4 人): 497 ~ 549 点 中位 (3 人): 352 ~ 409 点 下位 (4 人): 19 ~ 297 点 * 留年生 (4 人)

## 2. 分析

### 2. 1. 入学前の学業成績と中国語学習成果の関係

第二言語習得研究では、言語学習の成果は適性 (Aptitude) に左右されると指摘する。本節では、言語学習適性を表すと考えられる入学試験の英語の得点、および国語の得点、高校評定と中国語の成績の関係を分析する。

ピアソンの相関分析を行うと、1 期生の入試英語の得点と指標は正の相関が有意傾向であり ( $r(18) = 0.43, p < 0.08$ )、高校評定と指標は正の有意な相関があり ( $r(19) = 0.47, p < 0.04$ )、入試国語の得点と指標には相関が見られなかった ( $r(18) = 0.088, p < 0.7316$ )。

表 5 からわかるように、1 期生の英語の平均点は 1 年生春、秋、2 年生春、秋の 4 学期いずれの時点でも中国語の成績が上位の者が最も高い。入試英語の得点は中学・高校 6 年間学んできた外国語学習の成果を表すものであり、それが高いということは言語学習適性が高いと解釈して良いだろう。入試英語の得点は、大学でゼロから中国語を学ぶ者の成績を予測する材料になると言える。一方、2 期生の英語の平均点は 1 年生春、秋の 2 学期いずれの時点でも中国

表 5. 入学試験の得点、高校評定と中国語の成績

1 期生（平均点：国語 67.2、英語 49.1、高校評定 2.97）

調査 1	（1 年生春学期）	上位（11 人）	中位（7 人）	下位（4 人）
国語平均点	（100 点満点）	67.6	62.2	70.5
英語平均点	（100 点満点）	54.2	49.3	42.3
高校評定平均点	（5 点満点）	3.17	3.03	2.58
調査 2	（1 年生秋学期）	上位（8 人）	中位（7 人）	下位（7 人）
国語平均点	（100 点満点）	66.3	63.4	71.4
英語平均点	（100 点満点）	55.9	50.4	42.8
高校評定平均点	（5 点満点）	3.078	3.23	2.86
調査 3-1	（2 年生春学期）	上位（9 人）	中位（5 人）	下位（4 人）
国語平均点	（100 点満点）	66.9	65.2	67.3
英語平均点	（100 点満点）	55.8	50.4	47.3
高校評定平均点	（5 点満点）	3.19	3.06	2.83
調査 4-1	（2 年生秋学期）	上位（7 人）	中位（4 人）	下位（7 人）
国語平均点	（100 点満点）	61.1	73.8	65.7
英語平均点	（100 点満点）	56	51.5	49
高校評定平均点	（5 点満点）	3.36	3.3	2.77

2 期生（平均点：国語 55.2、英語 54.3、高校評定 2.99）

調査 3-2	（1 年生春学期）	上位（4 人）	中位（3 人）	下位（3 人）	留年生（3 人）
国語平均点	（100 点満点）	55.5	63.33	47.33	66.7
英語平均点	（100 点満点）	52.5	58	43.33	42.7
高校評定平均点	（5 点満点）	3.1	3.15	2.87	2.3
調査 4-2	（2 年生秋学期）	上位（4 人）	中位（3 人）	下位（4 人）	留年生（3 人）
国語平均点	（100 点満点）	55.5	57.7	53	66.7
英語平均点	（100 点満点）	52.5	52.7	48.7	42.7
高校評定平均点	（5 点満点）	3.1	3.3	2.5	2.3

語の成績が中位の者が最も高い。1 期生と異なる結果が出たのは、2 期生の上位には親族に中国語母語話者がいる者、中国語圏に長期間滞在した経験がある者がおり、入学前に蓄積した中国語の知識の有無が成績区分に影響したためと考えられる。

高校評定にも注目したい。中国語の成績が下位の者と留年生は「3」に満たない。高校評定は定期試験の成績の他、出席率、授業態度、宿題、課題の提出状況等、学内秩序を守る能力も加味して付けられた成績であり、それが低いと中国語の学習成果も上がらず、大学での単位取

得も困難であることがわかる。

## 2. 2. 動機と中国語学習成果の関係

多くの先行研究は、第二言語習得における動機の重要性を強調する。本節では、中国語の学習動機の有無と成績の関係を分析する。

表6. C専第一志望入学者と非第一志望入学者の学期末試験の総得点の分布

学期末試験総得点（1900点満点）	第一志望者（計6人）	非第一志望者（計13人）
～1500点	1人	1人
1400～1499点	1人	5人
1300～1399点	1人	2人
1200～1299点	1人	1人
1000～1199点		2人
800～999点		2人
600～799点	1人	
～52点	1人	

表6は1期生でC専に第一志望で入学した者6人と非第一志望で入学した者13人が、2年生秋学期迄の学期末試験（計19種類、1900点満点）で獲得した総得点の分布状況であるが、動機が有っても得点が低い者、逆に中国語を学ぶことなど全く眼中に無く入学して来ても高得点を収めた者がおり、更に、第一志望者の方に著しく得点の低い者がいることがわかる。2. 1. の分析で得た結果を用いれば、言語学習適性（入試英語の得点）の高い者は動機の低さを克服し、中国語の学習成果を上げたと解釈できるだろう。

## 2. 3. 授業の受け方と中国語学習成果の関係

第二言語習得では、学習ストラテジーが成果に影響を及ぼすとしている。曹2000.は言語学習に長けている者は▽言語形式に着目する▽実践練習を重んじる▽積極的に学習任務に取り組む▽学習過程を意識する▽学習任務の違いに柔軟に対応する——という5つの共通点があると指摘する。本節では、学習ストラテジーの1つである授業の受け方と中国語の成績の関係を分析する。

調査結果から、「講義は聴かない」「ノートは取らない」「発音練習には参加しない」「教科書の本文は覚えない」と答えた学生の割合は成績が下がるに連れて高くなる、という傾向が見られる。授業態度を観察していると、上位は教材の大事な箇所にマーカーを引く、配布したプリントは毎回全て持参して逐次見直す、分からないところがあると他の中国語科目の教材も調べて練習問題を解く等、理解、思考、記憶するために様々な工夫をしている。中位は自分が指名

された時だけ回答し、自分の番が終わると、「もう関係ない」と言わんばかりに携帯電話をいじり始める。下位は基礎学力の限界から教員の説明、指示が理解できないこともあり（表12参照）、思考するのをすぐに止め、「そんなん、わかんねーよっ!」とふてくされ、教員が何10時間もかけて作成したプリントに涎を垂らしながら90分間、机に突っ伏して寝る。賈1996.は「ノートを取った学生の既習学習の回想率は、取らない学生の7倍に上る」という実験結果を示しているが、表8を見ると、上位の3～5割は黒板に書かれなくても重要と判断した事項をノートに書き留めている。川島2004. は「音読後の記憶力や空間認知力は音読しない場合の20～30%増になる」という実験結果を示し、「人間は音読していると快感を覚える」という仮説も提示しているように、音読は外国語学習の成果を高める有効な手段であるが、表9を見ると、上位では約7割が音読の必要性を認識しているのに対し、中位、下位では大事かどうか分からないままとりあえず声を出しておく者の割合が高くなっている。

自由記述欄を見ると、上位は授業中の私語について、「学校に来て話をしているだけの人はいない」「先生側がまいつているみたいなので、それが心配」「やる時はやる、楽しくするときはするというメリハリをつけてもらいたい」「授業が全然進まない日などがあり、学費がもったいないと思う事があった」と書き、講義を聴かない学生に嫌悪感を抱いているのに対し、中位は教員の忠告について、「生徒に対して厳しすぎる」「聞いているフリをする」、下位は「むかつく」「こわくなってやる気をなくした」「悲しくなる」「うざい竹中は来ないで欲しい」と書き、受講する上での最低限のマナーも心得ていないこと、過剰に萎縮していること、自身の非を認めて改善することができないことが垣間見える。上位は暗唱について、「意味があると思うし、実際、中国人と話すときも役立った」「テストで大いに役立って、普段から暗唱してきて良かったと思った」「大変だったが、きちんと覚えたものは、ピンイン<sup>(3)</sup>も少しずつかけられるようになってきていると思う」と重要性を実感し、更に「宿題は大変だけど、そのおかげで自分の中の

表7. 授業中、先生の説明をよく聴くか（調査3-1, 3-2）

	全 体	上 位	中 位	下 位	留年生
よく聴く（1期生）	8人 (44.4%)	5人 (55.6%)	3人 (60%)	0人 (0%)	
よく聴く（2期生）	6人 (60%)	2人 (50%)	1人 (33.3%)	3人 (100%)	0人 (0%)
よく聴く授業と、そうでない授業がある（1期生）	9人 (50%)	4人 (44.4%)	2人 (40%)	3人 (75%)	
よく聴く授業と、そうでない授業がある（2期生）	4人 (40%)	2人 (50%)	2人 (66.7%)	0人 (0%)	2人 (66.7%)
あまり聴いていない（1期生）	1人 (5.56%)	0人 (0%)	0人 (0%)	1人 (25%)	
あまり聴いていない（2期生）	0人 (0%)	0人 (0%)	0人 (0%)	0人 (0%)	1人 (33.3%)

表8. 先生が黒板に書いたことをノートに書くか（調査3-1, 3-2）

	全 体	上 位	中 位	下 位	留年生
必ず書く（1期生）	6人 (33.3%)	1人 (11.1%)	3人 (60%)	2人 (50%)	
必ず書く（2期生）	2人 (20%)	1人 (25%)	0人 (0%)	1人 (33.3%)	0人 (0%)
先生が黒板に書いたことと共に、重要事項も書く（1期生）	5人 (27.8%)	3人 (33.3%)	1人 (20%)	1人 (25%)	
先生が黒板に書いたことと共に、重要事項も書く（2期生）	3人 (30%)	2人 (50%)	0人 (0%)	1人 (33.3%)	0人 (0%)
教科書に書き込む（1期生）	6人 (33.3)	5人 (55.6%)	0人 (0%)	1人 (25%)	
教科書に書き込む（2期生）	4人 (40%)	1人 (25%)	2人 (66.7%)	1人 (33.3%)	2人 (66.7%)
一切書かない（1期生）	1人 (5.56%)	0人 (0%)	1人 (20%)	0人 (0%)	
一切書かない（2期生）	1人 (10%)	0人 (0%)	1人 (33.3%)	0人 (0%)	1人 (33.3%)

表9. 先生のあとについての発音練習に参加するか（調査3-1, 3-2）

	全 体	上 位	中 位	下 位	留年生
する（1期生）	11人 (61.1%)	6人 (66.7%)	4人 (80%)	1人 (25%)	
する（2期生）	8人 (80%)	4人 (100%)	1人 (33.3%)	3人 (100%)	0人 (0%)
大事かどうかはわからないが、声は出す（1期生）	4人 (22.2%)	2人 (22.2%)	0人 (0%)	2人 (50%)	
大事かどうかはわからないが、声は出す	1人 (10%)	0人 (0%)	1人 (33.3%)	0人 (0%)	2人 (66.7%)
参加しない（1期生）	3人 (16.7%)	1人 (11.1%)	1人 (20%)	1人 (25%)	
参加しない（2期生）	1人 (10%)	0人 (0%)	1人 (33.3%)	0人 (0%)	1人 (33.3%)

語りようが増えたし、それがとても活かされている」（誤字は学生が記述したまま）「全て授業中に覚えるようにする」「生徒がある程度努力してほしい」と、中国語学習には学習者側の努力が不可欠であることを認識しているのに対し、下位は「予習をさせるのはやめたほうがいいと思う」と、その点を理解していないことが伺える。

講義にきちんと耳を傾ける、自ら進んで調べ物をする、ノートを細かく取る、音読に快感を覚える学生は学習事項が定着し、成果を上げることができるが、講義はおろか、指導や忠告も聞き入れない、ノートを取る、暗唱、宿題をするといった基本的な作業もできない学生は成果が上がらず、単位取得も困難であると分析できる。



表10. 教科書の本文を覚えるか（調査3-1, 3-2）

	全 体	上 位	中 位	下 位	留年生
できるだけ覚える（1期生）	5人 (27.8%)	2人 (22.2%)	2人 (40%)	1人 (25%)	
できるだけ覚える（2期生）	4人 (40%)	2人 (50%)	1人 (33.3%)	1人 (33.3%)	1人 (33.3%)
宿題なら覚える（1期生）	10人 (55.6%)	6人 (66.7%)	2人 (40%)	2人 (50%)	
宿題なら覚える（2期生）	4人 (40%)	2人 (50%)	1人 (33.3%)	1人 (33.3%)	1人 (33.3%)
覚えられない、あるいは覚えようとはしても覚えられない（1期生）	3人 (16.7%)	1人 (11.1%)	1人 (20%)	1人 (25%)	
覚えられない、あるいは覚えようとはしても覚えられない（2期生）	2人 (20%)	0人 (0%)	1人 (33.3%)	1人 (33.3%)	1人 (33.3%)

## 2. 4. 自身および他者に対する評価と中国語学習成果の関係

第二言語習得研究では、自己の認知活動（知覚、記憶、理解、問題解決）を評価し、コントロールする「メタ認知（metacognitive strategy）」能力が成果に影響すると指摘する。劉2002. は言語学習に関するメタ認知能力の1つに「フィードバックされた情報に基づき、学習方法の運用や成績、成果を審査、評価すること」を挙げる。学習成果に対する評価が低いと、学習者は努力を放棄して挑戦せず、成果が上がらなくなるのである。本節では、カリキュラム、自身の理解度、教員、クラスメート、C専に対する評価と中国語の成績の関係を分析する。

表11はC専のカリキュラムに対する評価を示したものである。1期生では、中国語のこま数が多い時間割を「同一事項の出現率が高まり、理解、記憶に有利」と評価する者の割合は上位で高く、中位、下位、留年生と成績が下がるに連れ、「多すぎる」「負担」と訴える者が現れる。自由記述欄でも、下位は「中国語の授業がつまらなく、最初の新鮮さもなく、嫌になってきた」、留年生は「週6コマは多いと思う」「C専の履修のし方はまちがっている」「2コマで1科目は生徒にふたんがかかただけでなんの意味もないので今すぐやめるべき」「テストが多すぎる。年々人が減少していくのでは？」と書いている。なお、面接中、「もっと自習時間が欲しい」という声が聞かれたので、「こま数を減らし、自習時間を増やす」という項目を立てたところ、2～3割が賛同している。一方、2期生は2次募集の際、中国語学習は容易ではないことを伝え、それを承諾した者にしか入学を呼びかけなかったことから、成績に関わらず、カリキュラムを高く評価する者の割合は高い。

表12は自身の授業理解度に対する認識を示したものであるが、2期生上位を除き、全体の7割以上が「理解できる講義とそうでない講義がある」「理解できないことがしばしばある」と答えている。自由記述欄でも、下位は「訳わかんない」「ついていけない」、留年生は「聴いているが、発音の仕方もピンインも覚えられない」と書いている。偏差値が示すように、C専は日

表11. 中国語が週6, 7コマ必修というカリキュラムに対する評価 (調査3-1, 3-2)

	全 体	上 位	中 位	下 位	留年生
多い (1期生)	3人 (16.7%)	1人 (11.1%)	2人 (40%)	0人 (0%)	
多い (2期生)	2人 (20%)	0人 (0%)	1人 (33.3%)	1人 (33.3%)	2人 (66.7%)
そのくらいある方がよい (1期生)	10人 (55.6%)	5人 (55.6%)	2人 (40%)	3人 (75%)	
そのくらいある方がよい (2期生)	8人 (80%)	4人 (100%)	2人 (66.7%)	2人 (66.7%)	1人 (33.3%)
コマ数を減らし、自習時間を増やして欲しい (1期生)	5人 (27.8%)	3人 (33.3%)	1人 (20%)	1人 (25%)	

表12. 講義が理解できるか (調査3-1, 3-2)

	全体	上位	中位	下位	留年生
だいたいできる (1期生)	3人 (16.7%)	2人 (22.2%)	1人 (20%)	0人 (0%)	
だいたいできる (2期生)	6人 (60%)	4人 (100%)	0人 (0%)	2人 (67%)	0人 (0%)
できる講義とそうでない講義がある (1期生)	14人 (77.7%)	7人 (77.8%)	4人 (80%)	3人 (75%)	
できる講義とそうでない講義がある (2期生)	2人 (20%)	0人 (0%)	2人 (67%)	0人 (0%)	3人 (100%)
できないことがしばしばある (1期生)	1人 (5.56%)	0人 (0%)	0人 (0%)	1人 (25%)	
先生の説明が理解できないことがしばしばある (2期生)	2人 (20%)	0人 (0%)	1人 (33%)	1人 (33%)	0人 (0%)

本の大学の中で最も低いランクに位置づけられている (1. 1. 参照)。C専の学生は基礎学力の限界から、学習が進み、難易度が上がると、どんなに噛み砕いて説明されても理解困難になることがわかる。表13は講義が理解できない原因をどう捉えているかを示したものであるが、「教員側にある」と考える者が1期生全体では約4割、上位に限れば半数を超えているのに対し、2期生では全くいない。更に、表14が示すように、1期生には共に学ぶクラスメートの能力、意欲がもっと高ければ、自分をもっと成果を上げていたと考えている者が4割、わからないが、もしかしたら伸びていたかもしれない、と多少いぶかる者も半数に達している。1期生は非第一志望者や他に合格した大学が無いという者が多い (表2参照)。浪人しなければならない、と奈落の底に突き落とされていた時に、「C専なら入れます」と2次募集をもちかけられ、「四年制大学の卒業証書が貰えるなら」と入学した者も多い。自由記述欄では成績に関わらず、「授業の進展具合、授業中の度を超えた私語により、大学生活に満足できない」(誤字は学生が記述したまま)「勉強の環境ではない」「やる気が出ない。高い学費を払ってまで来る価値

表13. 講義が理解できない主な原因（調査3-1, 3-2）

	全 体	上 位	中 位	下 位	留年生
先生の説明がわかりづらい（1期生）	7人 (38.9%)	5人 (55.6%)	2人 (40%)	0人 (0%)	
先生の説明がわかりづらい（2期生）	0人 (0%)	0人 (0%)	0人 (0%)	0人 (0%)	1人 (33.3%)
自分が勉強不足（1期生）	7人 (38.9%)	2人 (22.2%)	3人 (60%)	2人 (50%)	
自分が勉強不足（2期生）	7人 (70%)	2人 (50%)	2人 (66.7%)	3人 (100%)	2人 (66.7%)
自分が勉強が得意ではない（1期生）	4人 (22.2%)	2人 (22.2%)	0人 (0%)	2人 (50%)	
自分が勉強が得意ではない（2期生）	3人 (30%)	2人 (50%)	1人 (33.3%)	0人 (0%)	1人 (33.3%)

表14. クラスメートに能力、意欲の高い人がもっと多かったと仮定した場合（調査3-1）

	全 体	上 位	中 位	下 位
自分はもっと伸びていた（1期生）	8人 (44.4%)	4人 (44.4%)	3人 (60%)	1人 (25%)
クラスメートや雰囲気は自分の成績に関係無い（1期生）	1人 (5.56%)	1人 (11.1%)	0人 (0%)	0人 (0%)
もっと伸びていたか、不明（1期生）	9人 (50%)	4人 (44.4%)	2人 (40%)	3人 (75%)

はないと感じる」「学費が高い割には、食堂やコンビニの数も充実していない」「悪いところが多すぎる。良いところを探すが見つからない」「友人に自分が通っている大学をおしえられない」等、目白大学の授業、施設に対して大いに不満を持つ者、個人面接では2年生になっても「ここへ来てよかったのか、分からなくなることが良くある」「C専の友人関係や自分の進路について考えていると、来たくなくなる」「R大学の授業にもぐったら、先生が何にも注意しなくても、学生がずっと静かに聴いていた。目白もああいう風になって欲しい」等、目白大学への入学に対する後悔の念を吐露する者が少なくない。すなわち、1期生の大多数はC専に入学したことに心の底では納得しておらず、教員が折りに触れて、「他学科に行きたかったことは忘れて、今開いた中国語の扉の向こうでがんばっていこう」と励ましても、当初の志望が叶わなかったことを根に持ち続けているのである。ゆえに、成果が上がらない原因を「先生の教え方が悪い」「クラスメートがやる気が無いから、こっちまでやる気をなくす」と責任転嫁することで、自身の能力不足、努力不足を認めるのを拒否しているとも解釈できる。一方、2期生は第一志望者が辛うじて非第一志望者を上回ったこと、また中国語学習の困難さを承知した者にだけ2次募集を行わなかったことから、全員が自身の学力不足、勉強不足を素直に認めている。

### 3. 結論

以上の分析から、大学での中国語の学習成果を左右する要素として、▽入試英語の得点▽高校評定▽授業の受け方▽カリキュラムに対する評価▽教員、クラスメート、大学に対する認識——の5項目を挙げる。

本稿の調査対象は限られており、ここで得た結論を目白大学や大学一般に応用するには限界があるだろうが、入試の得点、高校評定と大学での成績の相関性、授業の受け方と単位取得状況の相関性、非第一志望入学者の責任転嫁傾向等は他学科、他大学でも認められるのではなかろうか。定員充足を第一に、専攻科目を学ぶ覚悟の無い学生を構わず入学させれば、教育現場では学習成果が上がらず、大学の対外的評価の低下、受験生の減少、果ては学校経営の危機という本末転倒の結果を招くだろう。今後は調査対象を広げた研究を行うと共に、学習成果を上げる質を備えた学生の獲得と大学経営を両立させるにはどうすべきかを模索したいと考える。

### 【注】

- (1) 各科目とも週2こま開講され、別々の教員がそれぞれに期末試験を行うので、1科目当たり2種類の期末試験が行われるが、1期生の成績は中国語1A（作文）の担当者1人（筆者）と中国語2A（読解）の担当者1人（日本人男性）の分のデータしか残っていない。
- (2) [http://manabi.benesse.ne.jp/doc/g30\\_nyushi/nyushi/2007ranking/poster](http://manabi.benesse.ne.jp/doc/g30_nyushi/nyushi/2007ranking/poster)を参照した。
- (3) 「ピンイン」とは中国語の発音を表すローマ字表記のことを言う。

### 【参考文献】

- Altman, H. &Vaughan James, C. 1980. Foreign Language Learning:Meeting Individual Needs, Oxford: Pergamon
- Jakobovits, Leon. A. 1971. Foreign Language Learning: A Psycholinguistic Analysis of the Issues (Rowley, Mass.: Newbury House)
- Larsen-Freeman, D. &Long, M. H. 1991. An Introduction to Second Language Acquisition Research. Essex: Longman Group UK Limited
- Skehan, P. 1989. Individual differences in Second-language learning. London: Edward Arnold
- 曹敏2000. 〈第二语言习得中的个体差异〉,《第二语言习得研究》, 首都师范大学出版社
- 贾冠杰1996.《外语教育心理学》, 广西教育出版社
- 刘珣2002.《汉语作为第二语言教学简论》, 北京语言文化大学出版社
- 川島隆太2004.『脳と音読』, 講談社現代新書

**Abstract :**

This paper aims to consider what factors are influential in determining the results of learning the Chinese language. The following results based on research and observation of students majoring in the Chinese language at Mejiro University were found:

- (1) It might be possible to predict the level of Chinese learners' results through an entrance examination of English.
- (2) It has been suggested that Chinese language learners who use certain strategies perform better than those who do not.
- (3) Proficient Chinese learners positively evaluate the curriculum.